

英霊に感謝

副理事長 深山 明敏

昭和20年4月29日に沖繩島北端東方海域において特攻・散華された故海軍大尉森丘哲四郎命（2階級特進、富山県黒部市出身、享年23）の74回忌にあ

たる昨年4月29日、東京都内の世田谷山観音寺特攻観音堂において、千玄室大宗匠による特攻隊全戦没者の御霊に對する献茶式が厳粛に行われた。千大 宗匠は、森丘命が昭和18年12月、東京農業大学から学徒出陣で舞鶴海兵団に入隊した際、同じ分隊に属し、その後も海軍第14期飛行予備学生として士官教育を受けた土浦海軍航空隊でも同じ分隊で起居を共にした同期生である。

「千ちゃん、俺は生きて還ったら、お茶の稽古をしたい。よろしく頼むよ」と、はにかみながら私に語った素敵な笑顔が忘れられないと、千大 宗匠は想い出を書いていらつしやる。

故森丘大尉は、その後の赴任地・北鮮の元山基地では、「戦闘特別攻撃法」の厳しい訓練の余暇を利用して茶道にも動し、府内散策の際に購入した楽浪焼の茶碗を愛で、遺された茶器の木箱蓋裏には自筆の辞世、「ちよろづの神の持たせる命なり 砕きて守れ 大君と國」が記されている。

また、彼が飛行作業に自信を失い、すべてが行き詰まった感で頭が重

く、苦しみながらも、ある日、お茶の席に参列すると、彼のお点前を見てよく笑う同席の女学生がおり、その時、「救われました。飽和状態の搭乗員の苦悶の生活からやっと脱出でき、今、この茶室で助けられたのです」と先生に感謝の気持ちを伝えたことが手記には遺されている。

この辞世の句は、大学時代に励んだラグビー精神と茶道の本質の会得が使命感に結び付いたものと推察できる。

靖國神社の小堀前宮司が辞職後の投稿記事（『文藝春秋』30年12月号）で、「祭神となられた方は、（一部略）どの方も死に際には、叫び、わめき、嘆き、或いは一瞬で亡くなっている。どれだけ恨みを吞んで亡くなられたかわからない。だから崇めることがないように、安らかにお鎮まりくださいとお祭りを続けてきました」と述べているが、英霊の最期の心境の捉え方には大きな格差がある。

大東亜戦争において、米国側は神道を熱狂的な日本人の愛国主義のバックボーンとみなし、神風特攻隊の必死の攻撃は、天皇を神とする宗教的狂信に基づいて実施されたと考え、連合国軍総司令部は「神道指令」を昭和20年12月、日本政府に対して発令し、その影響力は今日に至るまで依然として続いている。

尊い身命を国に捧げた英霊に、私たちは感謝と崇敬、鎮魂と慰霊の誠を尽くすべき役割があると思う昨今である。